の比よりあり、其證下に見えたり天和の書目錄に誤て漏し、にやあらん。○中略京都の俳士伊藤信德江戸に來り、松尾桃青、山口信章素堂の名寶と、三吟の三百韻を催す、于時延寶六年、是を江戸三吟と題て上木す、其卷のうちに、

前句　風青く楊枝百本けづるらん　桃青

附句　野良ぞろひの紋のうつり香　信章

又附　雙六の菩薩もこゝに達すがた　信德

今はかゝる附意を嫌へど、是延寶の調にて、昔を考るには却て便あり、

此附意を按るに、楊枝に野良の紋と附たるは、野良紋楊枝なり、紀子大矢數延寶五年獨吟前句、息のくさきも伽羅のかをり、歟附句、紋楊枝十双倍に賣ぬらん、又西鶴大鑑貞享四年印本七の卷に、えびす橋筋に根本浮世楊枝とて、芝居の若衆の定紋をうちつけ置しに、それ〳〵のおもはく、其子に枕のかたらひ及びがたき人、せめては心晴しに、此紋やうじを手にふれて云々とあるを、てらし合て考べし、さて野良揃の紋といふに、雙六と附たるにて、前の書目錄の條に論ぜしごとく、當時延寶を既に野良雙六をもてはやし、を思ふべし、淨土雙六の菩薩も、野良揃ひの達姿に移りかはりしといふ吟にて、此三句の渡り、延寶の昔を見るが如し、

類柑子　前句　痩たうて実もくはぬ花盛　其角

附句　これぞ雨夜の野良雙六　琴風

かゝる句もあれば、野良雙六といふもの、元祿の頃までは存在せしなるべし、

〔大江俊矩記〕文化二年正月二日丁亥、越前東隣岡田へ禮に行、あふぎ貳本、すゞ六壹枚貰來、

圖　攤

攤ハ、ダト云ヒ、又ダウチトモ稱ス、多クハ移徙、產養、庚申、饗宴等ノ時ニ行フ所ニシテ、其法、數